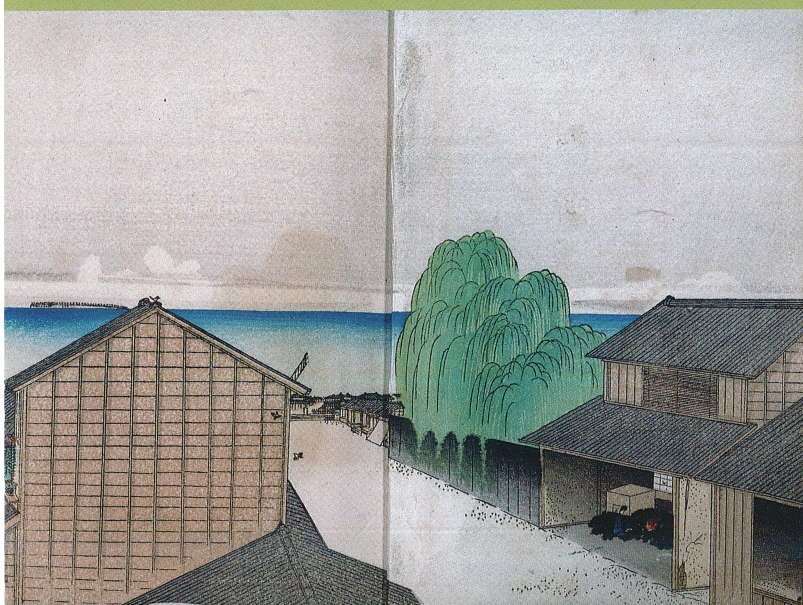


MEIJI MURA

明治村だより
2022 Summer
107



CONTENTS

- 明治村の建築に視る日本近代青春群像物語【7】…02
- 第四高等学校物理化学教室に新たな展示室“LAB”が誕生しました…05
- A La Meiji-mura
- 明治の黒漆喰 — 江戸の粋、明治の意気 — …06



明治村みらい基金

随時募集中
私たちの未来を豊かにする「明治」の価値
一緒に残し、伝えていきたいと思います



博物館明治村 協賛会員 募集案内

博物館明治村では、歴史的建造物の修繕や展示など村内整備の充実を図るため広く皆様のご支援を募っています。

- 1. 法人会員の種類と会費** (各1口あたり、消費税込)
 - 一般会員 10万円
 - ゴールド会員 100万円
- 2. 会費の用途**

明治村で展示・保存されている建造物の修繕や、村内の整備など公益目的事業費に充てさせていただきます。
- 3. 会員期間**

入会日より1年間
(入会月の翌年当月末日まで)
- 4. 会員の特典**
 - 会員証(記名式)の発行
 - 招待券の贈呈
 - 刊行物等の贈呈
 - 芳名の掲示
 - 法人名の銘板付きベンチの設置 (ゴールド会員のみ)
- 5. 問い合わせ先**

公益財団法人明治村 協賛担当
住所: 〒484-0000
愛知県犬山市字内山1番地
TEL: 0568-67-0314
E-mail: meiji-info@nrr.meitetsu.co.jp

協賛会員 (令和4年6月1日現在)

敬称略:五十音順

ゴールド会員

大成建設株式会社 矢作建設工業株式会社

一般会員

アイカ工業株式会社	アサヒ飲料株式会社	アサヒビール株式会社	厚見建設工業株式会社
株式会社安藤・間	株式会社磯部組	株式会社伊藤園	伊藤忠商事株式会社
因幡電機産業株式会社	株式会社魚津社寺工務店	株式会社エイムクリエイツ	株式会社NTTドコモ
株式会社NTTファシリティーズ	株式会社大林組	岡谷鋼機株式会社	株式会社オノコム
小原建設株式会社	鹿島建設株式会社	株式会社関電工	キリンビール株式会社
キンビパレッジ株式会社	株式会社熊谷組	株式会社鴻池組	コクヨマーケティング株式会社
五洋建設株式会社	株式会社ザイマックス	サッポロビール株式会社	佐藤工業株式会社
サントリーコーポレートビジネス株式会社	株式会社シーイーテック	柴山コンサルタント株式会社	清水建設株式会社
株式会社新高土木	株式会社スペース	株式会社扇港電機	ダイキン工業株式会社
大興建設株式会社	大成ユーレック株式会社	株式会社竹中工務店	株式会社谷澤総合鑑定所
株式会社丹青社	中京テレビ放送株式会社	中部スターツ株式会社	鉄建建設株式会社
東京海上日動火災保険株式会社	株式会社東芝	東洋電機製造株式会社	戸田建設株式会社
名古屋トヨペット株式会社	西日本電信電話株式会社	西松建設株式会社	能美防災株式会社
株式会社長谷工コーポレーション	株式会社日立製作所	株式会社ファミリーマート	株式会社フジタ
株式会社不動テトラ	ホーチキ株式会社	ポッカサッポロフード&ビレッジ株式会社	前田建設工業株式会社
三井住友海上火災保険株式会社	三井不動産株式会社	三井不動産ビルマネジメント株式会社	三菱商事株式会社
三菱電機株式会社	三菱ふそうトラック・バス株式会社	名高土木株式会社	名鉄EIエンジニア株式会社
名鉄エアパートナーズ株式会社	株式会社森本組	株式会社ヤシマキザイ	若松物産株式会社

表紙について 「雨談集」泉鏡花著、春陽堂、大正8(1919)年より

「明治村だより」第107号(令和4年夏号) 令和4年7月29日発行

発行 博物館明治村 〒484-0000 愛知県犬山市字内山1番地 電話 (0568)67-0314 <https://www.meijimura.com>
製作 大日本印刷株式会社

「明治村だより」 発行時期 令和4年9月中旬予定
第108号発行のお知らせ 申込方法 「明治村だより」第108号ご希望の旨、およびご住所・お名前を明記の上、送料(含発送手数料)140円とともに現金書留にてお申込みください。

東松家住宅

市中の立体露地

（その一）
館長 中川武

一 見かけのインパクトに驚く

東松家住宅は見えがかりから強い印象がある町家だ。名古屋築城時、建築資材調達のために熱田の海岸から引かれた「堀川」という運河がある。その両岸が東松家住宅の旧所在地である中村区入舟町で、しかもその中でも城下の中心に近く、もともと繁華な地域の一つである傳馬橋西南詰にこの住宅は位置してい



写真1 東松家住宅 正面から側面の通り庭への高窓開口部を望む

た。東松家住宅は堀川沿いに南北に走る街路に対しており、そのためかつては表が東向きに面していたが、移築時に博物館明治村の最も都市的な「レンガ通り」に面したことで、正面開口部より採光するため、表を南向きに変更された。

まず正面表構え写真1、図4参照である。一階軒下大走り部両端に築地塀風の袖壁を一階庇の上まで建て上げ、頂部に銅板押し出しの瓦型を載せている。袖壁の腰、正面の腰壁は石張り、

それより上部は全て黒漆喰塗屋造り、油拭き仕上げとしている。一見して土蔵造り風の外観であるが、一階西側寄りの大戸が入る入口部を太い柱型と冠木型に浮き出させて枠取りする。また一階には鉄、二階と三階には銅板巻きした木製丸棒の各々の格子窓の太い枠取りの四隅には木爪型（瓜の輪切りや木瓜の花びらのような装飾型）でアクセントをつけており、これが絶妙な効果を発揮している。三階両端には戸袋型が付けられているが、実際に戸袋として使われた痕跡はない。ただし太い枠取りで念入りに強調している。また、伝統的な町家は、厨子二階として二階は低く、しかも一階の壁面よりもセットバックさせて建ち上げるのが常である。ところが東松家住宅は三階建てであり、しかも一階から三階まで壁面の出を揃えて、カーテンウォールのようにみせることによって、立面に躍動感を生み出している。加えて三階の棧瓦葺の屋根を側面にも回して入母屋型のように葺下ろしていること、二階庇は銅板葺

であるが、一階の棧瓦葺の庇と袖壁の銅板瓦型が正面にまとまりを作っていることで、正面外観に強度をもたらしている。

ところで明治三十三年設立の犬山銀行（犬山市下本町）は、二階建てではあるが黒漆喰塗屋造りであり、木爪型格子窓や瓦葺型袖壁などの特徴を持っていたことが知られている（尾北写真帖「天正十二年刊、犬山市・横山佳雄氏蔵」）。東松家住宅も、後述するように明治三十年代の増築時前後に個人銀行を営んでいたと考えられるので、犬山銀行のような建造物の類似と考えられるが、三階建てと二階建てのインパクトの差には大なるものがある。

もう一つ、東松家住宅の外観を特徴付けているのは側壁の杉皮張りである。これと正面の黒漆喰塗屋造りとの対比が強いために、不思議な感興を呼び起こすのかもしれない。都市にぎっしり隙間なく建ち並ぶ町家と、山村の農家の数寄屋造りの風情の違いであろう。また、西側側壁は旧所在地では二階建ての隣家が隙間を詰めていたため、隣家の屋根の上面に沿うように三階吹き抜け通りの上部への明かり取り窓が段々に開口されていた。この明かり取り窓の段々配置の意味は明治村へ来て初めて明るみに出た。この不思議な配置の窓も、この建物の印象を強めていることは確かだと思われる（図5参照）。

東松家住宅・平面図

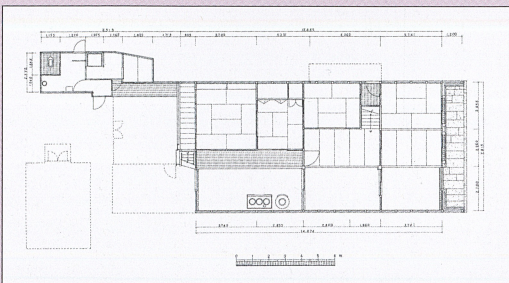


図1 一階平面図(竣工)
〈図面出典・全て「重要文化財(建造物)旧東松家住宅保存修理工事報告書」〉

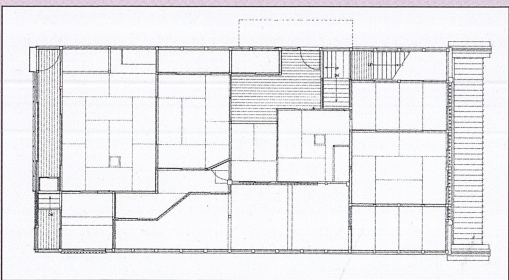


図2 二階平面図(竣工)

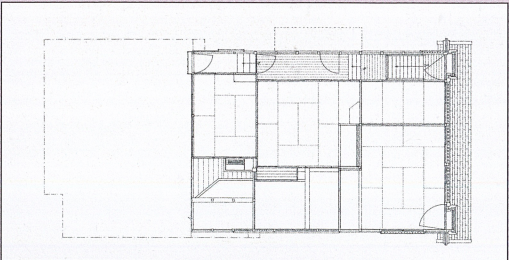


図3 三階平面図(竣工)

二 三階建ての町家が多かったのか

東松家住宅はその後区画整理のため解体を余儀なくさ

れ、昭和四十年に明治村へ移築された（註一）。また、その後の経年劣化にともなう修理時の調査により以下の創立沿革が判明している（註二）。

・明治三十四（一九〇一）年五月二十日上棟の棟札
・裏庭の土蔵の梁に、文政十三（一八三〇）年寅正月立柱の墨書
・三階茶屋入口の杉戸絵に明治三十四年十一月の落款

そのほか旧所蔵者である東松三左子氏等からの聞き取りと関連文献調査により、主屋一階の奥座敷からブツマ（仏間）は江戸時代末または明治初年に建築されたと知られる。東松家住宅は、建築当初は油家松蔵という人物が創業した油問屋であった。東松家は明治二十八年に堀川貯蓄銀行を興し、住宅を二階建てに増改築している。さらに棟札にある明治三十四年に三階建てとし、最上部北端の茶屋部分は最も遅く明治末年の増築とされている。その後、昭和二年に第百銀行と合併、東松

氏も転居し、この住宅は一時空家、貸家となっていたが、昭和二十年代に東松氏が再居住した。しかし昭和三十七年の前面道路の拡幅に伴う敷地狭小化のため、博物館明治村への移築が決定されたのである。

・柱径、柱間の寸法および建築史調査によれば、一階奥座敷の床は押板である。また他の柱径が四寸であるのに対し、ブツマと奥座敷の柱径は三寸五分と細い。ほかに、主要構造部材は他所部材よりも古びが見られる。また、ミセ（店）裏の六畳の間の幅は十一尺二寸、奥行九尺で、幅が八寸短くなっている。これは二階への階段の幅を三尺六寸と広く取ったためで、伝統的な厨子二階であれば三尺の幅の階段で十分であったろうと推量されるが、東松家住宅では二階の座敷や居住空間の拡充のために階段も広くしたものと考えられる。

こうした増改築の時期は、銀行業務を始めたとされる明治二十八年頃か、あるいは棟札にある明治三十四年頃の二説あるが、三階最上部の茶屋入口の杉戸絵の落款からみて明治三十四年頃が妥当であろう。

問題は三階建ての町家が建築可能だったかである。江戸時代には町家は三階建てどころか二階建ても禁止されていた。だから外から見ると低い明かり取りの窓がみえるだけの厨子二階は、実際は二階であるにもかかわらず、このスペースは物置に使う屋根裏であり、明



写真2 1階ミセ



写真3 一階通り庭 油商時代の調度類

かり取りの窓は採光のための窓に過ぎないのだ、という見せかけであった。江戸中期以降の大都市では広く商業が発展したが、土農工商の身分制の建前は相変わらず存続していた。そのため見かけは質素にするが、建物内部や細部は豪華で艶めかしいという、町家文化の妍が江戸後期には競われるようになるのである。この時期には、裏庭に武家の書院造や数寄屋造と見まがう座敷を設けたり、外観は質素だが絢爛たる装飾美の室内を持つ土蔵造が町家にみられるようになる。このような中、大都市の人口過密による居住空間の減少と、新たな空間の確保が幕末期には喫緊の問題となる。そのため京都では慶応三（一八六七）年九月十四日、江戸では同年九月二十五日に三階建町家の禁令が解かれた。名古屋も同様にこの頃解禁されたらしい（註三）。しかし大正八（一九一九）年に、都市災害防止のために「市街地建築物法」が施行され、木造三階建の新築は許可されなくなった。

したがって東松家住宅は、幕末・明治初期から大正初期までのおよそ五十年の間だけに建築が可能であった貴重な住宅建築の一例といえよう。明治の文明開化が進展し、木材制限や各種家作禁令が撤廃された明治末期から大

正初期のこの時期に、日本の木造住宅技術が最も発展したと考えられている。しかし過密大都市であっても、意外と木造三階建住宅は少ない。町家とはいえ庶民住宅では、城郭や望楼建築のような高層建物の造作経験は少なかったであろう。また都市住宅では大黒柱を除くと、概して細い柱を用いていたため、高層建築に必要な構造的安定性に不安があったのかもしれない。

また表通りに面する町家は間口は限られるが、「うなぎの寝床」とも俗称されるように、奥行きが長い敷地が多かった。上部に増築するより、奥に離れをつくられた方が手早かつたのだろう。

ところで東松家住宅には、現土蔵の他に二つの土蔵があったと伝えられている。しかし移築前の土蔵の位置も主屋に接近していること、主屋から裏庭の東西に伸ばされた便所や湯殿などの設備空間が中庭に向かって片流れ屋根で窮屈そうに納められているのを見ると、とても他に二つ土蔵があったとは想像できない。事実、明治四十三年の名古屋市実測図では、当家所在地の敷地はそれほどゆとりのあるものではない。それゆえ三階建てが必要になったのであるが、ここで東松家住宅の、町家としての、そして住宅建築としての、稀有といってもいい特徴が目玉される。この三階建ての町家は、いったいどのような商店であり、住まいであったのか、次回で探りたい。

註一 「明治村建造物移築工事報告書」（昭和五十三年三月、財団法人明治村）
註二 「重要文化財(建造物)旧東松家住宅保存修理工事報告書」平成十六年三月、博物館明治村
註三 内藤賢「東松家住宅」（『東海叢書十九 東海の明治建築』昭和五十一年、日本建築学会東海支部歴史意匠委員会編名古屋鉄道株式会社）

東松家住宅 正面図 側面図

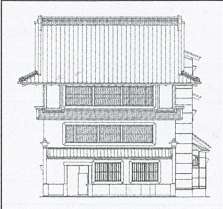


図4 正面図(竣工)

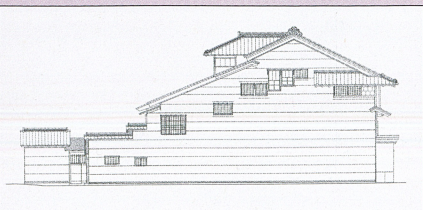


図5 西側面図(竣工)

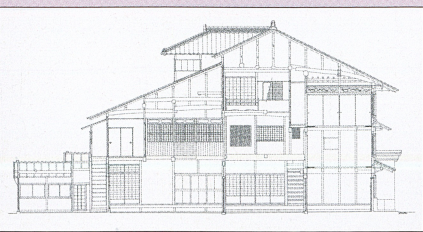


図6 縦断面図(竣工)通り庭

第四高等学校物理化学教室に新たな展示室“LAB”が誕生しました

博物館明治村では、第四高等学校物理化学教室内の常設展示を昨年一月にリニューアルいたしました。それに引き続き、今回は唯一の非公開となっていた部屋で、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて使用された実験機器「旧制第四高等学校由来の物理実験機器」コレクション(以下、四高コレクションと表記)の展示を公開しました。部屋の名称の「LAB」は英語の「LABORATORY(実験室)」の略称で、皆さん



展示室内部

に科学をより身近に感じていただく場といたしたく命名しました。十九世紀二十世紀は、科学やその研究のための実験機器が急速に発展した時期です。その変化が激しかったため、科学の発展に寄与した機器ですら不必要とされたり、「何のために」、「どのように」用いられたのかわからなくなり、数多くの実験機器が廃棄の運命に遭いました。「LAB」に展示されている四高コレクションは、一八七七(明治十)年に設立された石川県中

学師範学校、一八八一年に設立された石川県専門学校時代を経て、一八七七年に開校した第四高等学校(一八九四年に第四高等学校と改称)が、一九五〇(昭和二十五)年に閉校するまでの六十年余りの間に入手し、授業などに供されたものです。第四高等学校が閉校した後は、金沢大学文学部、理学部、教養部物理教室へと引き継がれました。その後、一九九三(平成五年)の金沢大学のキャンパス移転に伴い、「旧制第四高等学校由来の物理実験機器」コレクションとして、約九十点が金沢大学資料館へ、残りの約七〇〇点は、翌年石川県教育委員会へ移管、現在石川県立自然史資料館で保管されています。

博物館明治村では、この度、石川県教育委員会および石川県立自然史資料館のご好意を得、膨大なコレクションの中から一部を借用、展示させていただくこととなりました。建物とともにこれら実験機器をご覧いただくことで、学生たちが実験に勤しんでいた当時の息遣いを感じていただけましたら幸いです。

主な展示資料とそれらが用いられた時代背景をご紹介します。

長

さや重さ、かさ(体積や容積)をはかる単位は、国際的のみならず日本国内においてすら、統一された単位は現代までなかったと言っても過言ではありません。

日本では中国由来の「尺貫法」が伝統的に用いられ、長さ「尺」、重さは「貫」を基準とする単位を用いてきました。一八七五年に度量衡取締条例が施行され、1尺≒約三十三・三〇四cm、1匁(千分の一貫)≒三・七五六五二一gと定め、各県に一つずつそれぞれの「原器」を置くことが定められました。日本は一八八六年に、度

量衡の国際的な統一を目的として一八七五年に成立したメートル法条約に加盟しました。メートル法では、長さ・重さ・体積・面積のほかに時間の単位も定められました。

その後、一八九一年には日本国内では度量衡法が定められ、従来の尺貫法とメートル法の二つの単位が併存しました。一九二二(大正十)年に度量衡改正(メートル法)法案が成立しましたが、度量衡の切換は容易に進まず、一九五九年に尺貫法の使用が禁止され、メートル法の使用が義務付けられたことでメートル法が急速に浸透していきました。

立方体と立方樽は、容積(器などに入れることのできる容量)と体積(そのもの「かさ」の

概念を伝えるものとして、メートル原器の模型は、実際の長さの基準にするというより、メートル原器自体がどのようなかを伝えるためのものです。

音

楽で用いられる基準ピッチは一九三九年にロンドンで開催された国際会議で中央イ音(A)が四四〇Hzと定められています。展示されている風琴管のピッチはおよそ四三〇Hzです。

光

の研究は、リンゴが木から落ちるのを見て「すべてのものには重さがあること(＝万有引力の法則)」を発見したとされるイギリスの科学者ニュートン(一六四三―一七二七)が行っています。

彼は暗くした室内で、小さな穴をあけた窓から一筋の光を取り込みプリズムに当てると虹のような七色の光に分かれ、さらにもう一つプリズムを通すことにより七色の光が再び白色となることを発見しました、その現象を七色に塗り分けられている円盤を回転させると色が混じり合い白色に見えることをこの「透明色板」で示すものです。

ニュートンはこれを基に、「光は粒子である」という説を発表しましたが、同時代の科学者ホイヘンス(一六二九―一六九五)やフック(一六五三―一七〇三)は「光は波動である」とニュートンに反論しました。十九世紀になるとマクスウェルが「光は電磁波の一種である」ことを証明し、二十世紀初頭にアインシュタイン(一八七九―一九五五)が「光の粒子説」を復

活させ、現代では「光は粒子と波動の両方の性質を持つ」と考えられています。

光の三原色を示すRGBは赤(Red)緑(Green)青(Blue)の頭文字で、三色を重ねると白色となります。色の三原色は「赤」「青」「黄」で三色を重ねると黒色になります。印刷などでよく用いられるCMYKはC(Cyan:青+緑)M(Magenta:赤+青)Y(Yellow:赤+緑)K(Key:黒)の略称です。

光は色によって屈折する角度が違うことを「色収差」といいます。望遠鏡などにレンズを使用する場合は、性能の良いレンズを用いても色収差があるため像がぼけてしまうことを解消するために、この色消しレンズと呼ばれる材質の異なる二枚のレンズを巧みに組み合わせ、色収差を減らすものです。

ネオン(Ne)は、クリプトン、キセノンとともに一八九八年イギリスの化学者ラムゼーによって発見された「希(貴)ガス」と呼ばれる元素です。元素周期表で確認するとすべて一番右側の18族に属しています。

ネオンは一九〇七年に工業化され、一九二〇年に世界で初めてパリでネオン管によるイルミネーションが飾られました。展示されているネオンサインの裏側には次のような記載があります。

管色	使用硝子	封入瓦斯
紅橙	鉛硝子	ネオン
青	鉛硝子	ネオン+水銀
白	鉛硝子	ヘリウム
紫	鉛硝子	アルゴン
黄	ウラニウム硝子	ヘリウム
緑	ウラニウム硝子	ネオン+水銀
緑	クロム硝子	ネオン
群青	コバルト硝子	ネオン+水銀
乳赤	錫硝子	ネオン
乳青	錫硝子	ネオン+水銀

ネオン管に用いられている硝子(ガラス)と瓦斯(ガス)の種類で様々な色を呈することを示したものです。ウラニウム(ウラン)硝子やクロム硝子は緑がかかった色、コバルト硝子は青味がかかった色がガラスに現れ、ネオン、ヘリウム、アルゴンはそれぞれ電圧をかけると赤や緑などに発色します。

ガラス管の中央部には尖った部分が見えることから、管の内部を真空にしたことがわかります。

大切に保管されてきたこれらの実験機器を通して、実験を用いた科学教育によって近代日本という新しい時代を切り拓いてきた歴史に触れることは、見学者の皆さんの未来を築く糸口となると信じています。是非、明治村へお越しの際は、LABの展示をご覧いただけましたら幸いです。

明治の黒漆喰 — 江戸の粋、明治の意気 —

2丁目 東松家住宅



より上の部分は全て黒色を呈しています。これは黒漆喰塗りという左官技法で仕上げられているためです。漆喰とは消石灰（生石灰に水を加えて加工したもの）に砂や糊、切（細かく刻んだ藁、麻、紙等）を混ぜて水で練った塗り壁材です。漆喰は難燃と耐水という性質を持つことから、鎌倉時代頃に蔵の壁に多用されるようになりました。近世にはさらに店舗や座敷、大名屋敷や城郭の壁等にも様々な形で漆喰塗りが用いられました。幕末には関東地方で壁塗り職人（左官）の技が芸術の域に達し、顔料を混ぜた色漆喰を盛り上げ、彫塑像を表す「鏝絵」まで登場するのです。こうした江戸時代以来の漆喰技法は、明治時代初期、日本人棟梁たちが木材と漆喰で石や煉瓦造りの要素を巧みに真似て日本独特の擬洋風建築を生み出す力となったのです。漆喰はまた一方で、伝統的な蔵造りの町屋で根強く残ります。とりわけ、漆喰（いわゆる白漆喰）に削墨や油煙（菜種油や松脂の煤）を顔料として混ぜた「黒漆喰」を仕上げとして最表層に塗る技法は、幕末から明治にかけて江戸／東京で「江戸黒」と

の流行は、名古屋圏へまで到達したようです。明治時代中期から後期の名古屋市内や近隣都市の銀行を撮影した写真には東松家住宅の外観とよく似た例を見出すことができます。こうした例から鑑みると、東松家住宅もおそらく油商から銀行へ商売替えし、また家屋を大改装した明治三十四年頃には黒漆喰塗りにしていたと考えてよいでしょう。

雨や雪には弱い白漆喰の弱点を克服する黒漆喰は高価ですが実用性に富み、かつモノクロームの美しさも兼ね備えた外装技法でした。江戸の粋と明治のモダンが溶け合っただけで生まれた黒漆喰の町屋、その貴重な例が東松家住宅なのです。



一階腰壁から上部分の黒漆喰の様子

東松家住宅は名古屋市内の油商であった東松家所有の木造三階建の町屋で、一階入口の空間は「みせ」、その奥は「座敷」、また二階・三階は居室になっています。また、残されていた棟札や、建築部材の推定年代から、東松家住宅は幕末から明治時代初期に平屋として建てられ、やがて油商から

個人銀行へ商売替えした頃でもある明治三十四年に大改装を行ったことが判明しています。このようなことから、東松家住宅は幕末から明治時代後期にかけての町屋の形式展開を示す好例として重要文化財に指定されています。さて、東松家住宅の正面は石造りの腰壁

称されて流行をみせ、周辺域へ広まっています。もともと知られているのは、明治二十六年の大火以降、東京での黒漆喰の蔵造りの街並みを真似て街並みを作った「小江戸」川越の黒漆喰の街並みでしょう。江戸／東京圏で幕末から明治時代中期にかけて好まれた「江戸黒」——黒漆喰

主要参考文献

- 『近代の美術』第二十号「明治の洋風建築」、村松貞次郎編（至文堂）一九七四
- 『建築大辞典』金春国雄編、彰国社、一九七六
- 『明治村移築建造物報告書』（一）財団法人明治村編、一九七八
- 『日本の近代建築（上）——幕末・明治編』藤森照信、岩波書店、一九九三
- 『重要文化財 旧東松家住宅保存修理工事報告書 博物館明治村編、二〇〇五